

姫君の供養

新と歩く

圃瑛探訪

- 60 -

新と書いて「シムラ」と呼ばれる地区が国道296号線沿いの豊栄地区にあります。

文字を見ただけで正確に読める人は少ないかもしれませんが。

その語源は、新集落が木積や田久保地区に対して下村に位置することから、「シモムラ」から「シムラ」に変わったと考えられます。

3月下旬、新コミュニティセンターでささやかな法要が営まれました。同敷地内に「新村城姫君霊位」と刻まれ

た高さ70センチほどの石塔が建てられ、それに魂を入れる儀式でした。裏面には、「弘治2年（一五五五）新村城落城の折、不慮の落命にたいし碑を建て供養するものなり」と書かれています。

国道296号線を多古方面に向かい、小高い切通の左側にある集落が新区です。集落背後の小高い台地面が1550年代後半まで城郭だったとされる「新村城址」です。

地区の歴史にくわしい加瀬俊雄さんは、「城主は三谷胤重という武士で、その妻が富岡村から嫁入りする時に金の茶釜を持って来た。落城の際、姫君（胤重の娘）がかたみにこの茶釜を抱えて井戸に身を投げた。時が経ち、ある時この言い伝えを信じた新区の3人の若者が茶釜を掘り出し、富岡区に返し、今も残っている」と、この城にまつわる伝説を語ってくれました。

伝説に出てくる姫君を供養しようと、区の「女人中」が碑を建てました。女人中とは

女性グループ（講中）のことです。区の文殊院境内には1777年の「十九夜講中」、そして年代は不明ですが、「当村女人中」によって建てられた石仏がまつられています。江戸時代から続く安産・子育て、長寿延命などの願いを石仏に祈った女性グループの信仰活動が、現在も引き継がれています。

新村城址は昭和50年代の調査で、城主の普段の生活の場である「要害」や土を盛った土塁、空堀などが確認され、研究者に注目されました。城址は現在山林となっていて妙見や釈迦堂など歴史を伝える地名が残り、八雲神社もまつられ、山道にはかつて主だった道であったことを示す1740年造立の道祖神などがあります。

1603年に江戸幕府が開かれてから新村も落ち着いたようで、1681年には家数16軒、幕末から明治にかけて19軒、20軒と記録にあります。少戸数ながら新区は、落城姫君伝説の残る集落として、まとまった印象をもたらしています。

間秘書課広報広聴班

☎ 73・0080



3月に新地区で行われた供養碑の開眼法要